

「ケンミジンコのメス(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

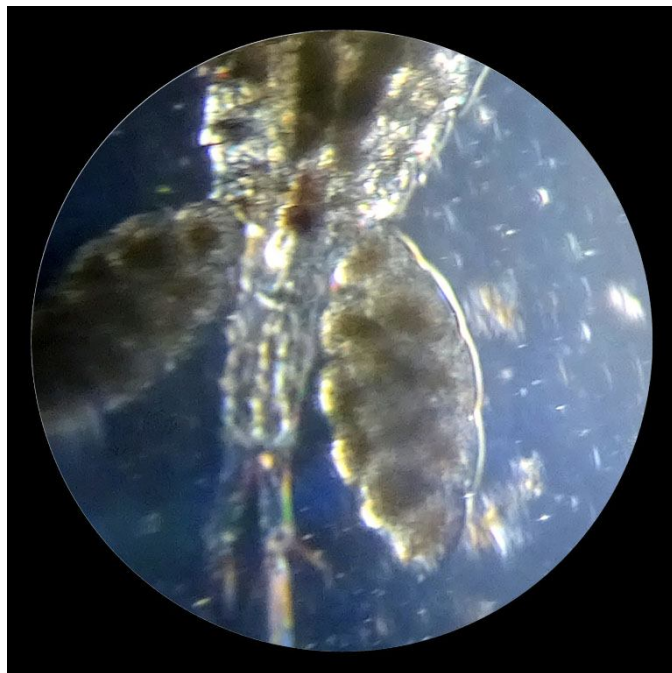
ライオン池(校庭の壁泉)の底のほうにある水や泥には、ケンミジンコがいる。しかも今の時期には、メスは卵を持っているものが多い。(下写真×40)



子ども達が顕微鏡で何度も挑戦するうちに、ついにケンミジンコが見つかった。「先生!いた!メス!卵!」私はすぐに駆けつけて、写真を撮ろうとしたが、激しく動いてうまく撮れない。こういう場合は、ケンミジンコにはかわいそうだが、ろ紙で少しスライド上の水分を吸い取って、動きにくくすると良い。



今度はうまく撮れた。その後も各研究所(班)の顕微鏡で、続々とケンミジンコが見つかった。卵のあるメスと、卵を持っていない個体が混ざっている。しかしこれはオスかメスカわからない。



生物顕微鏡(光学)は、透過光での観察が基本だが、このように反射光(天井の蛍光灯の光)で観察するのも良い方法である。こうすると、立体感や生物そのものの色がわかる。上の写真は、倍率を100倍に上げて、反射光で撮影したものだ。卵の一粒一粒まで鮮明にわかる。私はこの写真を配布することにした。



ケンミジンコは、「ノープリウス幼生」(上写真)→「コペポディド幼生」→「キクロプス(成体)」と成長する。その間10回以上脱皮する。顕微鏡観察で、時々幼生や抜け殻も見つかるので、非常に面白い。